広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	円地文子の「ひもじい月日」に描かれた女性像
Author(s)	ミンマ デ ペトラ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1993 : 61 - 65
Issue Date	1994-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039348
Right	
Relation	

円地文子の「ひもじい月日」に描かれた女性像

ミンマ　デ　ペトラ

はじめに

円地文子は女流文学の代表的な作家として女性の心、心理、女性と社会との関わり、男女関係を深く分析しています。ですから円地氏の作品には様々な女性のイメージが表われています。ある場合女性像は作家の自伝とたいへん深い関わりがありますが、外の場合、描かれた女性は作家の性格、考え方、人生などと全く違うと思います。ところがほとんどの場合、女性の不幸な生活、辛い人生について書いています。

（一）

「ひもじい月日」という短編小説は自分の結婚生活、自分の人生の多くの辛い経験が反映されています。1930（昭和五）年3月、東京日日新聞記者の円地与四松と結婚して、子供を生んでから家庭にばかり引っ込んでいました。ご主人は保守的なので奥さんが働くのはあまり好きではありませんでした。よく喧嘩をし離婚もするつもりでした。ほんとうに不幸な結婚でした。そして戦争、生死を彷徨う大病を経験してから人間としても作家としても円地文子は非常に変わりました。終戦から生活の苦労は作品の書くことを促し、その時からおそらくいちばん文学的な価値がある作品が発表されました。1953（昭和二十八）年「ひもじい月日」は「中央公論」に載りました。これは円地の文壇への返り咲きの決定的なきっかけでした。「ひもじい月日」によって円地は文学世界から好評され、第六回女流文学賞したのです。正宗白鳥という文芸評論家は「無慈悲な、冷酷な、苛酷な」「女の目でしつこく描いた男性のみすぼらしさ」と激賞しました。おそらく「ひもじい月日」がいちばん高く評価されたのはリアリズムの手法だそうです。その作品より円地はモーリヤックの小説論通りにこう書きました「環境や副人物はなるべく自分のよく知っている土地や人を使う」（「冬の記憶」）。現実的にさくという主人公の苛酷な人生を描きました。背中のあざのために女にだらしのない吝嗇な夫と結婚しました。直吉という夫は私生児がいたり不貞を働いたり仕事を首になったりしました。さくは一生懸命に働き始めて化粧品や荒物の店を開けました。しかしお金が足りなかったので勝と富枝という娘たちも仕事をしていました。二人とも不満でお父さんとあまりいい関係がありませんでした。富枝はお金がなかったので好きな男性と結婚することができませんでした。寂しくておとなしい富枝と違って勝はいつも兄弟と両親に対して無作法で乱暴でした。その家庭の悪い雰囲気の中で「中学校に通っている末っ子の幸一だけはそんな因縁がまつわっていない陰のない顔をしている。直吉にもさくにも似ていない鼻の低い眉の下ったおどけた顔でジャズソングを唄って足拍子をとったり、落語の真似をして剽軽な口をきくのが他愛のないようなものの、気を軽くするので、さくは安心して幸一にだけは父親や姉達の愚痴をきかせた。幸一はふ

むふむと身に沁まない様子できいていたが、何をきいてもけろりとしているのがさくには幸一の精神の無傷な証明のように思われた。」実際にその「けろりとしている」ということは「幸一の精神の無傷な証明」ではありませんでした。むしろ彼の無関心さやシニズムなどを表わしているのです。最後に幸一は冷やかな皮肉で母親にお父さんを殺す相談をしました。

それからある日突然直吉は倒れて脚が麻痺してしまいました。その時からさくは障害の夫を守るように自分の人生を犠牲にしました。そのような辛い結婚生活の中でさくのたった一つの希望は彼と別れることということでした。「直吉と別れてしまおうと、何度さくは思ったかしれない。それは結局三人の子供に足をとられて実行されなかったけれども、今出来ないでもいつかは出来る、いつかはきっと別れられるという願のような強い思いが一日に一度必ずさくの胸に湧き上り…それは年を経るほど、実現出来ないと解っているほど、強靭な活力になって、小さく痩せてゆくさくの中に無限に太って行った。」ここまでに表われた女性のイメージは耐えるばかり女性だと思います。つまりいくら苦労してもいくら悩んでも我慢できる女性像です。それまではいやいやだと思いながら夫世話して来ます。ところが最後に夫に対しての姿勢が非常に変わります。家族の邪魔者となった夫を殺す相談が息子にされた時にさくは絶対断わります。さく自身も別れたいと思っていた夫であったのに、殺してはいけません。逆にこれから積極的に夫を守るという姿勢になります。さくは体力が衰えた相手に憐れみを抱くことによって心のもち方を変えて、自分を持すことのできた女になります。こう言いました「直吉を殺してはいけない。殺させてはいけないとさくは呪文のようにつぶやいた。直吉の生命を庇うのは自分より外に誰もないと思うと気の遠くなるほど人気のないところに来たような気がした。それがどんな愛情の形にもはまらないことをさくは知っている。知っていながらさくは必死の力でそれをやりぬこうと決心した。」さくは夫の身のまわりの世話をしながら自分の方が先に死んでしまいました。死ぬ前にさくは華やかな夢を見ました。その夢では「暁闇らしいうすぐらい洲に、墨絵の鳥のような鳥が一羽立っていて…」それからその川の面から「虹のように輝き出した」水煙が立って、鳥が美しい鳳になります。夢の最初の暗いイメージがあとで円地が言った通り「何とも言えない絢爛たる世界になる。」同じようにさくは直吉に対して憎悪、怨恨を越えて、生命へのいとおしみ、他の人間への愛することができるようになります。その夢はさくの心の大きな変身の象徴です。

（二）

円地文子の作品の女性像でよく言われるのは二つの女性のタイプがあります。「男が永遠に恐れるタイプと、男が永遠に愛しつづけるタイプ」ですが、それは男性の立場から見られた女性のイメージだと思います。女性自体ではどのようなイメージを表わすのでしょうか。おそらく「ひもじい月日」と「女坂」という作品には同じように耐える女性のイメージがあります。「ひもじい月日」のさくも「女坂」の白川倫もエゴイストで不貞な男と結婚して辛く生きています。二人とも

夫と別れたがっているのでしがなかなかできません。その不幸な結婚の生活を我慢して、最後には二人とも夫より先に死んでしまいます。さくと倫が自分の時代の典型的な女性だと思います。さくは現代、倫は明治時代に生きていますが女性に対しての社会からのプレッシャーとか家族の中で一定の奥さんの役割というものが二人ともに反映されています。やはり倫の状態の方が辛くて厳しいでしがそれは明治時代の女性にとって当たり前でした。明治時代に生きていた女性はみんな夫に服従して黙って我慢しなければなりませんでした。夫は妻に対して非常に大きな権利を持っていました。「女坂」では極限状態として、倫は夫と一緒に彼のための妾を捜しに行って適当な少女を選びました。

「女坂」と「ひもじい月日」で描かれた女性のイメージが少ず円地の母方のほうの女性とたいへん深い関わりがあります。特に祖母のイメージはよく円地の作品に表われています。円地はおばあさんの生き方を見て、心に深く刻み付けられました。あるインタビューでこう言いました「…若い時には（おばあさんの行動が）馬鹿馬鹿しいと思ったんですよ、あんな生き方をね。なんでそんなに服従していなきゃならないのか、という考えが非常に強かったんです。…」

先言ったようにさくと倫は同じようなみじめな人生をおくるんですが二人の性格はある程度違います。倫はたいへん知的な女性で自己の内面観察ができますし合理的に自分の心を分析します。やはり始めに夫を信頼し愛しました。ところが夫は妾を作ったり、嫁と関係したりした時に倫が怒りも悲しみも感じました。しかし、次第に理性によってその感情を越えることができるようになりました。最後には夫に対して無関心でこの世の生活に対して無常を感じました。やはり心の安らぎを求めるように仏教の信仰にも支えられたのです。倫と違ってさくは自分の人生についてそんなに深く考えていません、いうとなれば自然に生きています。知性も意志も倫に比べればそんなに強くないのです。自分の中に苦労も悩みも我慢できるような大きな力がありますが信仰の力も知的な力もありません。むしろ円地があるインタビューで言ったように「さくの場合はやっぱり生活力だと思います。」その生活力がおしまいには特に大きくなって、夫を守る努力にも夫の汚物を積極的に洗う努力にも表われています。円地氏はこう書き出した「さくは働いていなければ不安なのだ。じっとして考えていると…何もかも化物の顔に見えて来てこわい。…直吉の汚れものを洗ったり、風呂に入れて身体を綺麗にしてやっている時が一番安心なのである。新しい糞のべとべとついたぼろきれや浴衣を、水道を出し放して足で踏んで下洗いし、その後石鹸をつけて洗ってはゆすぎゆすぎして、鼻をつけても匂いのなくなるまでゆすぎきった時ほど、さくの心の軽くなるときはなかった。まるで汚れものが自分を洗っているような気がする。」さくは直吉の汚れものを洗いながら自分の悩みを忘れてしまって、作家が言ったように「直吉自身が不愉快だということを忘れてしまって…彼の精神は救われていた…直吉の汚れものを洗濯したりするのが、むしろおしまいには喜びみたいになっていた…」。

そして倫とさくとの比較ならば、もう一つ異なる点があります。つまり最後の夫に対しての姿勢と感情というのです。さくの場合は前に言ったようにおしまいに夫に対して憐と愛情を抱けるようになって病

気で弱い夫に専念します。さくと違って倫が夫に対して愛情は死ぬ前にも感じることができません。無関心になります。

さくも倫も夫より先に死んでしまいます。さくは洗濯をしながら突然倒れて死にました。「声も響きもなかったので、しばらくは誰も気づかなかった。」倫は病気になってから数日後なくなりましたが死ぬ前にこう言いました「私が死んでも決して葬式なんぞ出して下さいますな。死骸を。。川の沖へ持って行って、海へざんぶり捨てて下されば沢山でございます…」。この言葉は夫と男性社会に対する抗議だと思います。円地はこう書きました「四十年来、抑えに抑えて来た妻の本念の叫びを行友は身体一ぱいの力で受けた。それは傲岸な彼の自我に罅裂れる強い響きを与えた。」倫と違ってさくは黙って突然死にましたが、さくの死も間接的に夫のエゴイズムの非難になっています。最後の場面では勝という娘は風呂場に入ってからお母さんの死に気がつきました。その時「さくの上身は直吉の浴衣を掴んだまま先濯板にかぶさって冷たくなっていた。」死ぬほどさくは夫の汚れものを洗いました。だからおそらく作家は間接的に夫にさくの死を負わせます。さくの死も倫の死も男性に苦しめられている女性の抗議の叫びだと思います。明治時代にもさくが生きている時代にも死だけによって女性は悩みから救われて、不平等な男女関係を非難できます。

（三）

今まで「ひもじい月日」と「女坂」という作。。で表われた女性のイメージを分析しましたが、前に言ったようにもう一つの女性のタイプが円地の作。。から出ています。つまり「男が永遠に恐れる女性のタイプ」とか妖美の女性です。そのような女性の面影は「女面」と「妖」という作。。に明らかに表われています。両方にも妖しい魅力を持っている女性が描かれています。特に「女面」の主人公は巫女的能力もエロティクな力も持っているのです。さくと違って三重子は夫と男性の復讐をしています。夫が死んでから執念的に嫁も外の人間も使うによって自分のよこしまでややしい復讐の謀反を企てます。ところが読者は最後になってようやく三重子の本当の目的がわかるようになります。小説の中で現在と昔、現実の人間と古典の人物、業と今の人生は混じっています。「妖」という作。。にも文学的な世界・現実の世界、昔・現在ははっきり分けられていません。その場合，主人公は自分で書いた小説の中で夫に対しての復讐の想像をします。千賀という描かれた女性は中年で魅力的ですが、年をとりながら美さの衰退を悩んでいます。その上に辛い結婚生活をして夫とは別棟に住んでいました。夫と会っても互いにあまり話しません。千賀の救いは文学です。自分で書いた小説から不満、悩み、夫に対しての憎悪が出ています。また千賀の強い性的衝動も愛の欲求も明かに表われています。「ひもじい月日」のさくの場合、性はあまり気になりません、そんなに重要ではないと思います。むしろさくにとってはセックスが非常に汚いことです。「（さくは）直吉の性慾を満足させて置かなければならない。愛してもいないのに直吉に身を委せ、次々に子供を生み、夫婦らしい体面をとりつくろって生きている自分をさくはしみじみ不潔な女だと思った。」実際に変人から夫を離れさせるためにも「夫婦らしい体面をとりつくろ

う」ためにも夫と性交しなければなりません。さくと違って「女面」と「妖」で描かれた女性は非常に大きなエロティクな力を持っています。千賀も三重子も中年の女性ですがまだ大きな情熱に燃えています。

おわりに

今まで言ったようにすべての円地文学に描かれた女性は不満で不幸な女性です。おそらく男性との関係は悩みや問題の要因です。特に「ひもじい月日」では主人公が男性に対して複雑な感情を持っていると思います。やはりさくは夫の欠点すなわち吝嗇や不貞や横暴などを次第に気がつきながら、彼を嫌うようになって彼と別れたがっています。しかし夫が病気になってから、弱くて無防備の夫に対してさくは憐れみ、人間への愛を抱きます。本当にさくは死ぬほど無償の自己犠牲をして愛によって自分の思いあがりや憎悪を越えて新しい人間になります。

「ひもじい月日」の最初に描かれた女性のイメージは最後のイメージと全く違うのです。その主人公の内面的な変化はうまく象徴的に夢によって描写されています。私はその夢の美しく輝いている「鳳」のイメージを特に気に入りました。本当にその夢では円地の文学的な才能は明かに表われていると思います。

参考文献

・「高見順・円地文子集」（現代日本文学大系）、筑摩書房
・熊坂敦子「インタビュー・円地文子氏に聞く」、国文学解釈と材の研究、昭和51年7月号
・Juliet Winters Carpenter「Enchi Fumiko: "A writer of tales".」、The Japan quarterly、1990